
犬の仕返し

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

犬の仕返し

【NZコード】

N3694D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

登校中に間違えて犬のメケの尻尾を自転車で踏んでしまった真一郎。すると犬が怒つて。実際にあつたら驚くどころではないでしょう。

犬の仕返し

富脇真一郎は中学校に自転車で通っている。田舎の学校で辺りは田んぼだらけでそののどかな中をいつも通っているのである。学校まで彼はいつも一人だ。一人の方が気楽だと思つてもいる。この日もスポーツ刈りの頭に白い学校のヘルメットを被つてその自転車に乗っていた。のんびりと自転車を走らせていると田の前に犬がいた。

白っぽい茶色の毛を持つ犬だった。やたらでかく舌を出してへつへつ、としている。よく見れば彼の家の近所の高坂さんの飼い犬であるメケであった。もう十年以上生きているかなり高齢の犬である。

「おい、メケ」

彼は自転車を進ませながらそのメケに声をかけた。メケは何とこちらに横顔を見せて道の真ん中に座り込んでいるのである。實に邪魔であった。

「どいてくれないか?」

だがメケはどくつもりはなかつた。相変わらずそこに座つてへつへつ、としている。それだけである。

「どかないのかよ。困った奴だな」

仕方なく彼がどくことにした。不満だが犬を轢くわけにはいかないのをそうするしかなかつたのである。ところが。

よけそこねてしまつた。それでメケの尻尾を轢いてしまつたのだ。見ればその尻尾もかなり大きく長い。そんなものを道にやつているからこうなつたのだがそれでもメケは鳴いた。

「ギャン!」

「あつ、御免」

真一郎は咄嗟に謝つた。しかしその時だつた。

「何をする!」

「えつ！？」
何とメケが喋つたのだ。キッといちばんを向いて怒つた顔をしている。

「痛いだらうが、真一郎

「痛いつて御前、何で」

「！？どうした！？」

メケは驚く彼に対する言づ。彼が驚いているのがわからないといった様子であった。

「俺の顔に何かついているのか？」

「どうしたもこうしたもないだろ」

真一郎は自転車を停めていた。そしてそこからメケに対する言づがあつた。自転車には乗つたままである。

「何で御前」

「話せることがか

「そうだよ、一体どうこうことなんだよ」

「何でもないことだ」

メケにとつてはそうであるらし。彼は平然としていた。
「言いたいのはあれだらう？俺が今話していることだな」

「そうだよ」

それ以外の何があるとこつんだ、真一郎はそつとつたかった。

「何で犬が人間の言葉を」

「俺はもう十一年生きているんだぞ」

これがメケの言い分であった。

「話せて当然だろ。字は書けないがな」

「そんなんのが理由になるのかよ」

「なるつ」

メケは胸を張つて強引に言つてきた。

「充分にな」

「それでなつたら凄いぞ」

真一郎はメケのその居直りめいた言葉に戸惑い呆れながらもそう

言葉を返した。

「何でそんなふうに」

「生きているつてことはそれだけのものがあるんだ」

メケはまた真一郎に述べた。

「だからだ。わかつたな」

「わからないよ」

真一郎は口を波線にさせて述べた。

「全然な」

「やれやれ、強情な奴だ」

メケはそんな真一郎の言葉を聞いて呆れてみせた。前足を人間の手のように動かして肩をすくめてみせたのである。不自然ではあるが人間めいた動きであった。

「そんな奴だとは思わなかつたよ」

「思つ思わなは勝手だよ」

真一郎はまたメケに反論した。

「メケのな」

「じゃあ俺が話せる」とは納得しないのか

「するわけないじゃないか」

結構ムキになつて言い返した。

「どうして納得できるんだよ、そんなことが

「じゃあもう一つ見せてやる」

メケはここにまた言つのだつた。

「面白いものをな」

「面白いもの?」

「そうだよ、今御前俺の尻尾踏んだよな」

メケはそこを抗議してきた。

「それは覚えているよな

「うん、御免」

真一郎もそれは覚えている。だから彼に謝罪した。

「悪気はなかつたけれど」

「だから極端にはしないさ」

メケもそれはわかっている。だがどうしても仕返しをしたいというのがまじまじとわかる。彼とて尻尾を自転車で踏まれてはかなり痛いのである。

「少しな。痛い目に遭つてもううぞ」

「痛い目に？』

「立つてみる」

そう真一郎に告げる。

「そうしたら俺が生きて言葉を喋れるようになつたこともわかるからな」

「それでわかるとは思えないけれど」

「いいから犬の話は聞け」

人の話と表現しないのがミソであった。メケは犬だからだ。人間の言葉を話して人間めいた仕草をしてもやっぱり彼は犬なのだ。

「わかつたな」
「わかつたよ。それじゃあ」
メケの言葉に従い立ち上がる。すると。
「そらひ」
「あつ」
右の前足を右から左に横に一閃させた。そうしたら真一郎は足を
すぐわれた。そうしてその場に尻餅をついてしまったのであつた。
「いたた・・・・・」
「こういうことだ」
メケはこけてしまいお尻を押さえて痛がる真一郎に対して告げた。
「これでわかつたな」
「ひょっとして今のも」
「そうだ、長生きして身に着けた」
「そういうことであった。」
「これでわかつたな」
「何かやつとわかつたよ」
真一郎は痛みを堪えとりあえず自転車に戻つてからメケに答えた。
「化け猫とかと同じだよね、それつて」
「猫と一緒にされるのは心外だがな」
それには少しムツとした様子だつたがその通りであった。
「そういうことだ」
「じゃああれ？メケつて化け犬？」
「馬鹿言つちやいけない、俺はきちんとした犬だ」
その言葉にはきつぱりと反論してみせた。
「それはわかつておくんだ」
「わかつたけれど。けれど痛いよ」
「尻尾の分だ。だが怪我はない筈だ」

こかしたことにはそう述べた。

「これでおあいこだ。いいな」

「わかったよ。けれどそれにしても」

まだ真一郎はメケに対してもうつり言つてゐた。

「まさかメケが話せるなんてね」

「ははは、知つてるのは御前だけだ」

それには笑つて述べてきた。目がかなり細まつている。

「嬉しいだろ」

「別にそれは」

首を傾げさせる。そうしたことは思つていないのである。

「思わないけれど

「何だ、面白くない奴だな」

「一応このことは秘密にしておくね」

真一郎はメケを気遣つてそう述べた。

「ばれたら大変だし」

「ああ。それは頼む」

それはメケもわかる。だから真一郎にも願つたのであつた。

「悪いがな」

「うん。それじゃあ僕は学校に行くけれど

「俺も家に戻るか」

メケはふと考へながら述べた。

「御主人と一緒にいたいしな」

「何だかんだで人が好きなんだね」

「そうさ。特にうちの御主人はな

真一郎の言葉に對して頷いてみせた。

「大好きさ」

「けれど。御主人には話さない方がいいよ

真一郎はそれも念を押した。

「驚くなんてものじやないからね」

「それも合点承知の助だ」

随分古い言葉を使う。犬としてはかなりの高齢なのがその理由であろうがそれにつけてもかなり古い言葉である。メケの爺むさい性格がわかる。

「安心していいぞ」

「わかつたよ。それじゃあね」

「ああ、勉強を頑張つて来いよ」

「うん」

「ついでに一つ言つておく」

メケはまた一言付け加えてきた。

「何?」

「今度尻尾を踏んだら承知しないからな」

「わかつたよ。それじゃあね」

「ああ、またな」

何だかんだで別れを告げて真一郎は学校に、メケは自分の家に向かう。だがどうしても真一郎にとつては腑に落ちない話であった。犬が人の言葉を話せて妖術も使える、長生きしているというだけで。

「何かなあ」

そのことに釈然としないまま学校に向かう。だがそれもすぐに頭の中から殆ど消えてしまっていた。行く途中で今彼が気にしている女の子と会えたからだ。彼女を見ているともうメケのことは忘れてしまっていた。彼が人の言葉を話すことも真一郎にした仕返しも。結局彼にとつてはそういう程度のことしかなかつた。

犬の仕返し　　完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3694d/>

犬の仕返し

2010年10月8日15時49分発行